

鳥取共生動物市民連絡協議会

講演会「不妊手術のすすめ」によせて

2001, 9/22

不妊手術のすすめ

人類が農耕生活を営み集落に定着して以来、猫は人間と共生してきました。時代や文化が異なる都度、人間社会は猫を神に祭り上げたり、魔女の化身として大虐殺する等翻弄してきましたが、人と猫の長い共生の歴史（千年単位の歴史ですよ！）の中で、猫が人々の生活をねずみの害から守ってきたのは変わらぬ事実です。

近年、鳥取ではどうでしょう？数十年前まで、鳥取市内でも各家庭はネズミとりを備えていました。ネズミと隣り合わせの生活を送っていた時代、猫はネズミ捕りとしての社会的役割を評価されていたのです。人々が日々の買物をする八百屋さんでは、野菜の間に猫座布団を敷き、猫をおいてねずみ番をさせる風景も珍しくありませんでした。

しかし環境整備がすすみ、住居設備の改善につれ、ねずみそのものが人の目に触れにくくなっています。日々の食材がネズミに齧られる心配がなくなると、人々の意識から猫の果たす社会的役割は急速に薄れていきました。この現象はとりわけ都市部に顕著です。「猫は一体何の役に立つの？」一、何十年前には聞かれなかった質問がとびだすようになりました。

猫は今でも人間社会をネズミから守っています。けれどその役割は小さくなり、以前とのように高い評価を維持出来なくなってきました。反面、ペットとしての役割の比重は増し、鳥取でも猫に心を寄せる人は少なくありません。猫愛護派がいる一方、猫に無関心な人々は猫の自由徘徊が引き起こす迷惑行動を喧しく言い立てるようになりました。猫が好きか嫌いかで問題が論じられるようになり、いつのまにか猫は社会的立場を喪失していきました。

人と生息圏を重ね合わせ共生する猫を、人間社会から排除する事は出来ません。社会が猫の生存権を擁護していくのに、人為的な頭数管理は必至です。猫好きと猫嫌い、市民と行政、専門家が、一緒に猫問題を考える事が、猫の社会的立場を回復する事につながるのではないのでしょうか？今晚は一回目の試みとして、不妊手術について岡本先生の講演を皆さんと一緒に聴講したいと思います。